

[様式 3]

## 技術開発完了報告 (平成19年度)

近畿中国森林管理局 森林技術センター

課 題	自主1 人工造林による広葉樹用材林施業体系の確立 「保残木施業・ケヤキ植栽試験」				開発期間	平成9年度～平成19年度		
開発箇所	釜谷国有林596か (0.86ha)	担当部署 森林技術センター	共同 研究機関	林木育種センター 関西育種場	技術開発 目 標	3(1)	特定区域 内 外	○
開発目的 (数値目標)	幅広い広葉樹用材の需要に対し、人工造林による有用広葉樹の育林技術の体系化を図る。ここでは、高齢級スギ林分に、スギ、ケヤキを樹下植栽し、その植栽派パターンによる生長の違いを調査する。							
実施経過	平成9年度製品事業実行箇所において皆伐予定箇所を保残木施業に変更 形質良好なスギを主体に約12m間隔で保残木を選定 10.3.10 保残木調査 スギ51年生 77本 胸高直径40.9cm(28～60cm) 樹高27.0m(21.5～32m) 10.3.25 育種場からケヤキ実生Ⅱ年生苗管理換え 42系統 2,580本(本試験地と上下田展示林に植栽) 10.4. 植栽0.51ha(別紙植栽配置図のとおり) 11.4.18 スギ補植 11,13～19 下刈り及び林内整備							
開発成果等	<p>○ 植栽密度別試験結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3000本/ha、4500本/haを見れば九州5～9の系統が比較的優位。これらに比較して福井1・2、京都1、鹿足河内2の生長が悪いが、初期生長の良否、植栽箇所の地位等が関係している可能性あり。</li> <li>・ 混植区については、縦列植栽区がスギ、ケヤキ植栽区において樹高・根元ともに優位であるが、これは同植栽区が斜面下方に限定されていることの影響も否定できない。</li> <li>・ 広葉樹は場所の微妙な違いにより影響を受けることから、密度別試験区、混植区ともに更に試験を継続して品種によるものか、地位によるものか等について明らかにする必要がある。</li> </ul>							

注) 1 「課題」欄には、技術開発課題名の他に番号を付して記入する。

2 「特定区域内外」欄には、技術開発課題の実施箇所について特定区域内は「○」、特定区域外は「●」、特定区域内外両方は「◎」のいずれか記入すること。

3 「開発目的(数値目標)」欄には、開発目標及びコスト削減等について民間事業者が取り入れているコスト等比較し、出来る限り数値を記入すること。

4 「技術開発目標」欄には、国有林野事業における技術開発基本目標の1～5に該当する番号のうち、該当する目標の番号を記入すること。

5 「開発成果等」欄には、開発成果やその活用状況、普及状況等について記入すること。

6 成果を取りまとめた報告書等については、速やかに提出すること。